

研究の普及を支える 基盤としての論文執筆

「研究する」というフレーズを聞いて、どんなことを思い浮かべるだろうか。多くの場合、「計画を立てて、データ収集し、その収集したデータを分析して新しい知見を生み出す」というふうに考えがちだ。研究の究極的な目標が、新たな知識の創出であることを考慮すれば、悪くない解答のようにも思えるが、実学である看護学にとっては狭義の理解ということを押さえておく必要がある。

そのことを考えるために、看護研究に関する定番教科書のひとつである『Nursing Research : Generating and Assessing Evidence for Nursing Practice』（Polit & Beck, 2011, pp.56-60）をひもといてみる。研究デザインによっても多少違いがあるようだが、看護研究にはいくつかの段階がある。量的研究における段階を例にとると、概念段階（conceptual phase）、計画段階（design and planning phase）、実施段階（empirical phase）、分析段階（analytic phase）、そして普及段階（dissemination phase）の5つである。

「概念段階」には、問題の特定や関連する文献の調査等が含まれ、「計画段階」には、研究デザインの決定、研究対象の抽出や介入、変数の測定、研究対象の保護などに関する方法の策定が含まれる。そして、「実施段階」では、実際にデータを収集し、分析できるかたちにデータを整え、「分析段階」で実際に収集したデータを分析し、結果の解釈を行なうわけである。ここまでの、われわれが「研究する」というフレーズで思い浮かべる狭義の「研究」である。

しかしもうひとつ、「普及段階」があるのを忘れてはいけない。この段階は研究デザインによらず共通である。「普及段階」では、2つの重要なことが行なわれる。ひとつは得られた知見を伝達することであり、もうひとつはその知見を実践にいかすことである。これら看護研究のステップを知識の流通サイクルの観点から捉え直すと、概念段階～分析段階が「知識の生産」、普及段階が「知識の伝達」および「知識の活用」ということになる。本特集では、この普及段階、特に知識の伝達にかかわる執筆や投稿に焦点を当てて、論考を行なう。

企画：前田樹海（東京有明医療大学看護学部教授）